

徳田秋聲と日露戦争 ― 掌篇「おち栗」の意味 ―

― 「陛下の赤子を陛下の砲をもって射つことはできません」
（司馬遼太郎『坂の上の雲』より）

小林 修

抄録

徳田秋聲の日露戦争期の作品を検討し、従来まったく顧みられることがなかった作品群、「春の月」「通訳官」「前夫人」「將軍出づ」「おち栗」に焦点を当てて論じた。とりわけ「おち栗」は日露戦争における日本軍の不条理で残酷な実態をさりげなく描き出しており、注目すべき作品と思われる。その所以を司馬遼太郎『坂の上の雲』や桜井忠温『肉弾』との比較参照の上、詳細に論じた。

キーワード

「日露戦争」「旅順」「戦時小説・戦争小説」「肉弾という白兵戦」「おち栗」と「実なし栗」

1

明治三七（一九〇四）年、日露戦争勃発に伴い、きわめて多くの戦争報道雑誌が創刊されたり、既存雑誌が改題転換されたりしたことは既によく知られている。その主なものを挙げれば、博文館の『日露戦争実記』並びに『日露戦争写真画報』、育英舎の『日露戦争実記』、同じく駿々堂『日露戦争実記』、實業之日本社『征露戦争』、富山房『日露戦報』および『軍国画報』、大学館『日露大戦争

記』、金港堂『日露戦争記』、そして春陽堂の『日露交戦録』、さらに近時画報社の『戦時画報』、東陽堂『征露図絵』、郁文舎『軍事画報』及び『少年日露戦記』、時事画報社『日露戦争時事画報』、勢英舎『日露戦争画報』、その他『日露交戦画報』（日露交戦画報社）・『日露戦争』（外交時報社）・『日露戦史』（国光社）・『日露戦誌』（錦文館）・『日露戦争詳報』（兵事雑誌社）等々である。出版社は異なるが同じ誌名のもも見られる。ところで、黒岩比佐子は『編集者 国木田独歩の時代』（角川選書 平成一九年）の中で、次のような興味深いゴシップ記事を紹介している。

▲戦争雑誌記者のチャンピオン 国木田独歩。此人、『戦事画報』に依り、春陽堂『日露交戦録』の記者徳田秋声と取組んで勝ち、又た『日露戦争実記』の山路愛山、塚越停者マサトと取組んで見事に土俵の外に取って投げたり。

（『新公論』「文壇雑人形」一九〇五年三月号）

『戦時画報』は『近時画報』の改題、『日露交戦録』は文芸出版社として著名な春陽堂創刊の戦争雑誌、『日露戦争実記』（育英舎）は山路愛山主筆の『独立評論』の改題雑誌である。独歩の『戦時画

報」が多くの戦争雑誌の中でとりわけ好評であったことは異論のないところであるが、秋聲が春陽堂の『日露交戦録』の記者であったという情報はこの記事以外知られていない。試みに『日露交戦録』を閲読してみると、同誌は明治三十七年二月に第一号を発行しているが、編輯人は前田次郎、発行人は樋口助治である。第二二号（八月六日）からは編輯人は川久保建に代わっている。また誌面を通覧してみても掲載小説に秋聲の作品は見られない上に、掲載記事も秋聲名は皆無である。写真を多く採り入れた『日露戦争実記』『日露戦争写真画報』（博文館）や小杉未醒など多くの画家を起用派遣した『戦時画報』に比して『日露交戦録』の誌面は概して平板で特長に欠ける印象を受ける。その原因の一つには、他の雑誌が多く旬刊であるのに比して、『日露交戦録』だけが月六回刊行という無理な方針を強行したことにあると思われる。（実現出来たのは明治三十七年三月のみ）したがって売れ行きは芳しくなかったものと思われ、それゆえであろうか、戦争継続中にもかかわらず、明治三十七年十月六日の第二八号を以て早々と定期刊行を終了している。この後は翌三八年三月に『日露交戦録 奉天附近大会戦』（本多直次郎編）および同七月『日露交戦録 奉天附近大会戦』（本多直次郎編）を刊行したのみである。これは他誌に比してきわめて早い撤退であったと言える。先のゴシップ記事のごとく独歩の『戦時画報』に早々と敗北を喫したことは確かであろう。

さて、この戦争雑誌に秋聲が関わっていたかどうかは先に見たごとく、その可能性は少ないのではないか。少なくとも『日露交戦録』の誌面からは秋聲が関わったという痕跡を窺うことはできない。『日露交戦録』には山本笑月「負傷兵」、稲岡奴之助「浦塩美人」、宇田川文海「召集令」、泉斜汀「特志看護婦」などの戦争小説

が掲載されているが、秋聲の小説は見られない。逆に他誌に秋聲の戦争小説が掲載されていることから見ても、秋聲が『日露交戦録』の記者をしていた可能性は少ないと思われる。例えば、先のゴシップ記事にある山路愛山・塚越停春の『日露戦争実記 定時増刊戦争文学』（育英舎 明治三十七年四月号）には秋聲の「通訊官」が掲載されている。その他、戦争雑誌ではないが、「春の月」は『文芸倶楽部』（博文館）、『軍事小説 出征』は金港堂刊である。しかし『日露交戦録』への関与は兎も角として、この時期に春陽堂とはまったく無関係だったわけではない。既に『徴』（明治44年）の中の記述によって、秋聲にも従軍の話があったことが知られている。

「君は観戦記者として、軍艦に乗るつて話だが、然うかね。」

谷中の友人が或日、笹村の顔を見ると尋出した。

「けど、それは子供のいない時のことだよ。危険がないと言つたつて、何しろ実戦だからね。」

友人は然う言つて笹村の意志を翻さうとした。

そんな仕事の不似合なことは、笹村にも能く解つてゐた。

（『徴』四十二）

この従軍依頼が他ならぬ春陽堂の樋口助治（先に見たごとく『日露交戦録』の発行人でもある）からのものであったことが、八木書店版『徳田秋聲全集』に収録された樋口助治宛の秋聲書簡で明確となった。おそらく春陽堂からの従軍依頼というこうした経緯が、秋聲に関する先のゴシップ記事の元になったものと推察される。やや長文であるが、必要上全文を紹介しておく。封筒はないが、日付は明治三十七年の四月乃至五月と推定されている。

拝啓 参堂可及候ところ折あしく来客にて不果、其意愚札申上候。

従軍の儀は先づ参り候事に致度候が、実は先日もちよつと申し候とほり旅費は別として、目下出立するには母の方と書生への給用、其他先月の支払残り、其に洋服等内輪に見積り候ても百円以上は入用にて、今書きつゝあるものが間に合へば宜しけれど、まゐるとなれば十分に筆を執つても居られず候ゆゑ右金子御借に預からねばならぬ始末に御座候。是は甚だ申兼候事にて候へども洋服なども少しは人並らしいものを着ざれば、陸とは違ひ軍艦のうちは見苦しかるべしと存じをり候。

此儀御相談かた／＼お目にかゝり度存じ候得へども書中御伺ひ申候。

然し忌憚なく申上候へば、他に希望の方候へば其の人へ御譲り下され度候。

猶小生まゐるとなれば、朝鮮の方もちよつと一見致度野心にござ候。

先は右のみ委細は電話にて

下谷四四九

樋口様

尚日数予定が知りたく存じ候

秋生

この文面によれば、秋聲は従軍の件をいちおう承諾しているが、他に希望者があればその人物になるべく譲りたいと述べるなど迷いを見せている。『徴』に見られるように、この時期の秋聲は小沢はまとの間に長男一穂が生まれ、やむなく妻子の入籍を済ませたものの未だ結婚の公表はなされず、妻との間にいざこざも絶えない状態

で、夫婦仲は決して安定したものではなかった。結局〈谷中の友人〉(小峰大羽)の説得もあり、従軍は断念されたのである。ちなみに、上記書簡の「陸とは違い軍艦のうち」云々の文面から見ると、秋聲に依頼があったのは、陸軍ではなく海軍従軍と推測されるが、当時海軍は従軍を許可していなかった。しかし諸方からの強い要望に依り、海軍省は捕獲ロシア船(満州丸)を観戦船として旅順方面に派遣し、旅順口封鎖状況や連合艦隊の模様を視察させたことがあった。出航は明治三十七年六月一二日横須賀港。貴衆両国会議員代表や外国大使公使館付武官や内外新聞記者など五十五名が搭乗した。秋聲に話があったのは、この満州丸による観戦視察であったと思われる。結局秋聲は辞退しようだが、この時の搭乗者は、三宅雪嶺、石川半山、志賀重昂、菊地幽芳、塚原洪柿園などであった。秋聲の代わりに春陽堂から派遣された人物は分からない。『日露交戦録』によれば、第五号(3月6日)「本誌の特色」欄に「特派員加藤剣堂」を従軍せしめたり」とあり、第二二号(8月6日)には「遼陽戦に備え、編集員中嵯峨の屋主人矢崎鎮四郎氏を派遣」とあるのみである。前者は満州丸出航以前であり、後者は以後の派遣で共に陸軍である。観戦船満州丸の動向については、第二四号(8月26日)のグラビア頁に満州丸一行が基艦三笠に東郷大将を訪問した時の写真及び「平壤浮碧樓に於ける満州丸一行歓迎会」「京城に於ける対露同志会記念撮影」が掲載されているが、「以上二図は山根正次代議士寄贈」とあるところから推察すれば、春陽堂からは秋聲に代わる満州丸への記者派遣はなされなかったようである。以上の事実から見て、『日露交戦録』もしくは春陽堂と秋聲とは日露戦争という未曾有の時局を介した直接的関与(派遣従軍記者あるいは戦争雑誌編集記者)は薄かったと見てよからう。しかし、文芸

出版社春陽堂とは師尾崎紅葉の時代から秋聲も関わりが深かったと見られ、こうした観点もふまえて日露戦争という戦時下における秋聲による戦時小説の展開を考えてみたい。本稿で主に検討しようとする「おち栗」が春陽堂『新小説』に掲載されたからでもある。

2

戦争雑誌中もっとも好評をもって迎えられた『日露戦争実記』および『日露戦争写真画報』を発行した博文館は、総合雑誌『太陽』の他、従来からの文芸雑誌『文芸倶楽部』は継続して発行していたが、その『日露戦争実記』掲載の『文芸倶楽部』三月号の広告には次のような文言が見られる。

日露開戦の時に当り、本誌は一面出征軍人を鼓舞し、一面留守家庭を慰藉せんとす。愛国の子女本誌の微志を諒として倍旧の購読あらん事を

〔『日露戦争実記』第3号所載 明治37年3月3日〕

こうした広告文面を裏付けるように、『文芸倶楽部』三月号の〈小説脚本〉欄の構成は、小栗風葉「予備兵」・徳田秋聲「みち芝」・武田桜桃「動員令」・江見水蔭「出陣の前夜」の四篇である。秋聲の「みち芝」以外は戦時小説であることは題名からも明瞭である。このような傾向は他の文芸雑誌も同様で、時局柄戦時色の強い作品を載せ、作家も好むと好まざるとに係らず戦争小説・戦時小説を執筆せざるを得なかったものと思われる。「みち芝」は戦時色のない作品だが、この後、秋聲もまた翻訳も含めて十数篇の戦時小説を残している。こうした秋聲の戦争小説を概観してみると、戦意高

揚や国威発揚を期した作品は見ることができない。これはこれまでの秋聲文学の傾向から考えても首肯できるところであろう。秋聲の戦時小説には戦地を舞台にしたものは「通訳官」のみ（「危機」は代作と見做されるので除外）であり、他は徴兵や出征に関連した家族や恋人の話、戦死した兵士を持つ肉親の悲しみなど、いわゆる「銃後」の国民の悲歎を描いたものがほとんどであると言ってよい。こうした傾向の戦時小説の中で、秀作は「春の月」（明治37年4月20日発行『文芸倶楽部定期増刊 花吹雪』）であろう。同じ『文芸倶楽部』の前号に掲載の「みち芝」は他の作家たちの創作が全て戦争小説ないし戦時小説であるのに対し、全く戦時色は窺われない作品であった。しかし、この「春の月」以降秋聲も戦時小説に手を染めることになる。だが、「春の月」は先の『文芸倶楽部』広告にあった「出征軍人を鼓舞」したり、「留守家庭を慰藉」したりする側面はまったく窺うことはできない。先ず「春の月」を検討してみたい。

*

この小説は、虎と安吉という二人の職人（大工）による場末の天婦羅屋における会話から始まる。二人に共通の知人で大工仲間の兼吉が出征することになったのだが、彼には幼い男の子と老母がいる。だがその子の母親は実は現在の安吉の女房である。腕はいいが、酒飲みで乱暴でだらしない兼吉に嫌気がさしたお初は兼吉と子供を捨てて同じ職人仲間の安吉と引つ付いたわけである。当然のこゝと安吉夫婦と兼吉とは現在には不仲であり行き来はない。その兼吉が年老いた母親と3歳になる弥吉を残して出征するという。虎は安吉に同じ職人仲間としてこのまま知らん顔をしてやり過ごすのは人情からみてもどうかと思う。まして国家の非常時だ、江戸っ子として

これまでのこだわりを捨てて気持ち良く送り出してやってはどうかと持ち掛ける。安吉も場合によっては弥吉を一時預かってもいいと思いい、お初と相談して餞別でも持って兼吉を訪ねようと考えて、とりあえず帰宅する。

帰った安吉は早速お初にその話をする。気の強いお初も子供のことは気に掛けており、兼吉が戦死するようなことがあれば、そのまま二人で弥吉を育てようと話し合い、先ずはお初一人で兼吉の家を訪ねて行く。お初は弥吉にはおもちやのラッパとサーベル、お袋には甘いもの、兼吉には好きな沙魚の佃煮を取り揃えて、いそいそと兼吉宅を訪れる。

ここまでの展開を見ると、この物語は未曾有の大戦を控えた庶民の戦時美談、銃後の人情話としての結末が予測される。しかし秋聲の小説はそのような読者の期待を裏切ることによって生成するのだ。お初はひたすら下手に出て兼吉の出征を機に弥吉の引き取りも含め、これまでの経緯をめぐる感情的融和を訴える。しかし兼吉は決してお初を赦そうとせず激しく罵倒し続ける。弥吉（子供）の話になると、「兼吉が鋭く罵る声は、次第に曇りて来た」り、お初も「何時か鼻声に成つた」りはするが、結局お初も捨てセリフを残してすすごと引き返す幕切れとなる。二人の最後のやりとりは、次のようなものである。

「さあ、早く帰つてくれ。手前が目の前にまごまごしてると、胸糞が悪くつて為様がねえ。怪我でもしねへうち、さつさと帰つて了ひねえ。」

「帰りますとも。お前さんのやうな没分曉わからずやに掛つてゐた日にや、此方が腹が立つて了ふ。」

「何だと。」

「子供なんか、如何なつても介やしない。子でも親でもない、何だ豪さうに。はい、帰りますよ。」

「下手まへたごとくと、生命はねえぞ。」

「ふん、お前なんかに生命を取られて耐るもんか。然よなら、大きにお喧しう。」

「阿母おつか、塩まいておくれ。」

地の文を極力切り捨てて、ほとんど会話だけで展開を図つて来たこの物語は、戦時美談としての予定調和は結末で裏切られるが、この後、秋聲には珍しい次のような短い抒情的描写で締めくくられる。絶妙な結末である。

外へ出ると、月はまん丸く蓋かきを被て、空はおほろに、軟やはらかな其光を暈ぼかす水蒸気、花やかなうちに、一種の哀あはれを添あはれへてゐる。蹤々つづつかと路次を出やうとすると、弥吉の声が又一時耳みみに立つた。

(以上原文は総ルビ)

戦時小説に似つかわしからぬ「春の月」と題された所以である。最後の捨てセリフとは裏腹に、お初は弥吉の声に後ろ髪を引かれつつ、春の夜の湿りを帯びた月明りの中を帰路につくのである。あたかも樋口一葉の小説を思わせるような味わいの好短篇である。この時期の秋聲小説には会話文を主体としたものは多く見られるが、これほど地の文に頼ることなく、ほぼ九分通り会話だけで作品を駆動すると同時に、日露戦争という国家的非常時に対する当時の庶民の受け止め方も浮かび上がらせている作品も珍しい。秋聲の全短篇の中でも、もう少し注目されて良い小説と思われる。

ちなみに、こうした作品からは、秋聲における小説技法としての東京弁の習得という問題も浮上させる。同じ金沢出身の泉鏡花は、上京後悩んだあげく寄席に通い詰めて東京弁を習得したと言われている。秋聲の場合も、何等かの苦心を要したと推察されるが、この頃親しく交流していた江戸っ子の小峰大羽（画家・俳人）の助言に浴したこともあったのではと推察される。秋聲との間に入って小沢はまとの結婚入籍を勧めたのも小峰であったし、先に見たように、秋聲の従軍を止めたのも彼であった。後年の事柄に属するが、小峰は余技として『東京語辞典』（大正6年10月、新潮社）を刊行しているほどである。秋聲はこれに「序」を寄せて「此の著の如きは、君が江戸通たる一面の射映で、小冊子に過ぎずとはいへ、色々の意味で最も興味の深い珍書である。」と述べている。小峰も「凡例」において「一、現時の小説、多くは東京を舞台とし、市民を主人公とす。これ等の語は、現時文芸の作品中頻々として散見するもの也。藝術の徒、この書を座右にせば、よく読みよく味ふに於いて裨捕する所あるべきを信ず。」との一項を加えているほどである。

3

「春の月」と同年同月に秋聲はもう一つ短篇「通訳官」（明治37年4月）を発表している。掲載誌は『日露戦争実記定期増刊 戦争文学』（育英舎）である。これは先述したごとく山路愛山主筆の『独立評論』の改題誌である。小説欄は、小杉天外「天下一品」・小栗風葉「決死兵」・徳田秋聲「通訳官」・三島霜川「島の大尉」の四篇で、いずれも戦争小説である。「通訳官」は秋聲の戦時小説の中では珍しく戦地（朝鮮）を舞台としている。この小説は、騎兵中尉である「自分」と同郷の旧友である鈴木一誠君が意外にも通訳官とし

て北韓の戦地に来ており、二人は三年ぶりに戦地で邂逅した奇遇に驚き、宿泊所の民家で懐旧談にふけるところが一篇の主意である。とりわけ浮沈の多い鈴木の家歴が語られるのだが、翌日の定州辺の偵察においてロシアの斥候隊との衝突が起り、鈴木通訳官は不運にも戦死するに到る結末である。この小説の執筆時、海軍は既に二月八日の仁川港海戦を始め、三月末の旅順口閉塞戦における広瀬中佐の壮烈な戦死などを含む本格的な海戦が繰り広げられていたが、陸軍は黒木將軍の第一軍が韓国鎮南浦に上陸（先遣隊は二月に仁川に上陸）を開始したのが三月十一日であり、平壤を経て鴨緑江方面へ向かっている頃に当り、本格的な戦闘はまだ始まっていない。鴨緑江を渡河、九連城占領に至る陸軍最初の戦闘が開始されたのは五月一日のことであった。ちなみに、田山花袋が博文館から従軍した奥將軍の第二軍が遼東半島に上陸開始したのは、これよりさらに後の五月五日（花袋の塩太澳上陸は五月七日）からであり、乃木將軍の第三軍の上陸に至っては六月六日からであった。したがって「通訳官」の執筆は三月下旬以降と考えられる。掲載誌の発行は四月二三日である。同時掲載の小杉天外「天下一品」も小栗風葉「決死兵」も共に旅順口海戦を採り入れている。風葉の「決死兵」は日本の連合艦隊が二月九日に旅順口攻撃を開始した時戦死する息子と、その強欲な父親の回心を描いている。天外の「天下一品」はヒロイン春子の許婚者有田義夫の戦死を「有田少佐は第二回の旅順閉塞が決行され、彼の軍神と呼ばれる、に至った広瀬中佐が壮烈なる戦死を遂げた時、他の閉塞隊を指揮して名誉なる戦死をなしたと云ふ事である。」と記している。春子はこの悲報を号外で知ったのだが、実際の海軍省官報の号外は三月二十九日に大々的に配布されている。とすれば、天外が「天下一品」を脱稿したのは四月に入ってからと見ら

れる。また、三島霜川の「鳥の大尉」は日清戦争の威海衛海戦で武勲を挙げ金鵄勲章を授与されたが、片腕を失い退役を余儀なくされて、或る島に隠遁した元大尉が、日露戦争を迎え、島の若者たちの応召がなされる中で去来する胸中の想念を描いたものである。この中にも広瀬中佐の壮烈な戦死に触れた箇所があるゆえ、脱稿は四月に入ってからと思われる。先に触れたように掲載誌の発行日は四月二三日である。それにしても二作品の脱稿が遅いように思われるが、当時の戦争雑誌の発行頻度を考えればこれで間に合ったようである。ともかくこの当時、国民の耳目を集めていたのは海軍の戦果であったことは容易に推察されるのだが、秋聲だけが、まだ本格的戦闘も迎えていない陸軍を題材にしていることは興味深い。

4

「通訳官」の最後の節で、秋聲は次のごとく書いている。

翌朝夙く寝覚めて、自分と自分の従卒、他に二人の騎兵と鈴木通訳官とは、防寒具に身を固めて、凜冽肉を殺いで落とすやうな朔風の中を、鉄馬の嘶き勇ましく、定州街道を彎へて北へ進発した。我軍定州に入る前に、我將校斥候と敵の威力偵察隊との小衝突は、既に世間陸戦観望家の目に、非常の興味をもて、読まれたであらうが、此闘に斃れた鈴木通訳官の不幸を、誰も然るまでに感じなかつたらう。

こうしてこの後、鈴木通訳官の戦死の経緯が叙述されるのだが、国民の耳目が海軍の戦果に集中している最中に、本格的戦闘を未だ迎えていない陸軍の動向は国民の関心をどれほど集めていただろう

か。そもそもこれは秋聲による全くの虚構と見做すべきなのか、それとも戦地での実際の出来事に依拠しつつ小説化された結末と見るべきなのか、これを見極めることは秋聲の戦争小説、戦時小説への取り組みの熱量を計ることに繋がる。

*

博文館の『日露戦争写真画報』は『日露戦争実記』の好評に後押しされ、新たに写真及び絵画に重点を置いて創刊された戦時画報である。その第一巻は四月八日に発行されている。この創刊号は、定期的に旅順口海戦の写真や絵画が中心を占めており、「征露戦史」という記事の方も当然海軍の戦史が多く比重を占めている。しかし、海軍の後に「陸戦の先鋒」という記事があり、その最後近く「定州を取る」の見出しで以下の記述がある。

時に三月六日、順安に在りたる丸尾騎兵中尉は、兵卒三名と通訳一名とを率い、定州の敵情を偵察すべきの命に接す。定州は順安を距る二十五里にあり、中尉は乃ち此行生還を期せざるを部下に告げ、進むこと六里、肅川に宿し、翌七日早朝出発、正午安州に着す。此時前方に敵八百あるを聞き、清川江を渡りて進むこと二里許、日西山に春く頃ほひ、山後に敵兵二十五騎あるを聞き、其夜襲せんを慮はかり、退きて江畔の寒村差荘里に宿し、八日扨曉発せんとして前山を望めば、山上に敵兵二十余騎徘徊するを見る、仍て中尉等五騎、刀を抜き疾駆して進めば、随て退却するを、追行くこと三里にして、遙かに前方大寧江を望むに、敵四十騎ばかり、將に江を渡りて退かんとするを見、直ちに追跡すること十里許、定州の近傍に至れば、敵は始めて我勢の僅かに五騎なるを知り、馬を回して逆襲し来る。中尉は敵の兵力を見んと欲し

兵卒及び通訳を駐めて独り進むに、端なく路岐に於て敵騎と衝突せしかば、直ちに兵を促して退却せしが、この間定州には、敵の騎兵約一中隊あるを確めたり。それより退路、又も道路の曲折せる處にて、突如約二十騎の敵と出会せしに、敵は衆を頼みて銃を乱射し、従騎は馬を撃たれ、徒歩格闘して戦死し、中尉の身辺にも銃丸雨下したるが、幸ひに事無く四騎帰着して、斥候の大任を全くし、是に於て従来問諜の報告の敵なしと言へるは誤りにて、陸続前進中なるを確め得たり。(後略)

『日露戦争写真画報』第1巻(明治37年4月8日)

以上がささやかな前哨戦で、この後、この斥候情報を基に定州まで進軍するに至るのだが、秋聲の「通訳官」がこの丸尾中尉以下五騎の偵察隊を題材にしていることは明らかであろう。事實は丸尾中尉の「従騎」一名が戦死し、「四騎帰着」とあるように、通訳官は無事帰還したわけである。秋聲の「通訳官」では、当初七騎の敵斥候隊を追尾していったところ、二十騎となって引き返してきた敵に襲われ、鈴木通訳官と従卒との二名が戦死するという結末である。この脚色については後に触れるが、先ず秋聲が全くの虚構によって「通訳官」一篇を書きあげたのではなく、戦地における現実の事件に依拠しつつ作品化しているところが注目される。しかも国民の耳目を集めている海軍の旅順口閉塞戦ではなく、陸軍による本格的会戦の前哨戦とも言えぬ程度のささやかな戦闘である。既述したように秋聲の戦時小説は、国内を舞台にいわゆる銃後の国民男女の様々な生き様を描いたものがほとんどだが、戦地を舞台に戦闘場面を導入した作品は珍しい。しかも実際の戦闘に依拠した作品となれば、なおさら特異な位置を占めるものと言えよう。

*

「通訳官」は、その掲載誌(前出)を検討してみると、さらに興味深い事実には逢着する。先ず、掲載小説にはそれぞれ口絵が附されているが、天外の「天下一品」は石川寅治画(カラー1頁大)、風葉「決死兵」は尾竹国観画(カラー折込)、秋聲「通訳官」は平福百穂画(モノクロ1頁大)、霜川「島の大尉」も平福百穂画(モノクロ1頁大)である。他にグラビア頁は明子皇后の写真やロシア女性や子供の写真、韓国の風景写真、愛国婦人会総会の写真などに交じって、二葉の戦争画がある。一葉は満谷国四郎画の「田所近衛騎兵の奮闘」(目次説明)と、もう一葉は「我が軍艦の砲撃」(目次に作者名無し)である。前者は折込み、後者は一頁大である。問題は前者の満谷筆の画である。折込画本体のキャプションには「田所騎兵単身多勢の露国斥候騎兵と奮戦す」とあり、(本文説明参照)とあるのだが、本文中の何処を閲してもその「説明」が見当たらないのだ。この満谷の画は倒れた馬の横で剣を抜いて多勢の露軍騎兵に立ち向かおうする「田所騎兵」の雄姿を描いたものである。この画を眺めている中に、これは秋聲の「通訳官」の題材となった丸尾騎兵中尉の「従騎」を描いたものではないかと気付いた。先に見た『日露戦争写真画報』の記事には、独り奮戦した「従騎」の名前は明記されていない。だが、もし「田所」であれば、他にもそれを明記して報道した記事があるのではないか。そして、先に紹介した博文館の『日露戦争写真画報』の先行誌『日露戦争実記』(第6編、4月3日発行)にも関連記事を見出した。先の『画報』第1編の記事に先立つこと五日である。

「七、第2回陸戦、田所一等卒の戦死」

平壤占領後我騎兵は長駆して早く既に安州を併略し引続き三月九日、丸尾中尉は三騎を率ひて偵察の爲め北に向ひしに、忽ち敵兵の三十騎と会ひぬ、勇敢なる吾兵は上下僅かに四騎の少数をもて、約八倍の敵中に馳突せしに、彼の長刀を帯びて自ら任ずるコザック兵狼狽して馬首をめぐらし退き去るを只管追ひて追ひて博川を涉りしも、深く重地に入るを慮つて追ひ捨てに帰り来り、旧津を過ぐる時昌城方面より来たりし約四十騎の敵の為に横さまに撃ちかけられしかば、尚さきの三十騎の返し来たらんを思ふて背進せしに、乱発せる敵弾の為に、我が騎兵一等卒田所清熊氏馬を射倒されしが、頓てふりかへりし時は徒歩にて刀を振りひつゝ、多数の敵と接戦せるを見しも、勝敗の数明らかなるを以て已むなく安州に引上げしが、韓人の多くが云う所によれば其後乱刀の下を切り抜け一民家に屠腹して死したりと、是を第二の衝突となす。

『日露戦争実記』第六編(明治37年4月3日)

発行日が五日遅い『画報』の記事と比較してみると、こちらは丸尾中尉の部下の方に焦点を当てて記録しており、推測通り田所騎兵は丸尾の部下であり、露軍斥候隊との遭遇戦で戦死した人物であると判明する。しかし、『実記』の方は、通訳官が同行したことには触れていない。また両誌には遭遇した敵偵察隊の数や場所にも相違があり、日時も一日ズレがある。これは当時の戦地における取材状況を考えれば、致し方ない齟齬であろう。ちなみに『実記』の見出しに「第2回陸戦」とあるが、第一回の陸戦は二月二八日に敵兵五騎の斥候に対し、平壤七星門付近を準備していた吉村中尉の分隊が銃撃を加えて、敵二騎に負傷を負わせ撃退したというもの。つまり田所清熊騎兵一等卒は、日露戦争における我が陸軍の戦死者第一号

であったわけである。とすれば、海軍の戦果や戦死者とは比較にならぬが、陸戦史上記念すべき存在であったことになる。それゆえ、その最期はいささか美化されて報道されたことも考えられるが、こうした位置付けから見れば、秋聲「通訳官」掲載誌に満谷国四郎画の「田所騎兵単身多勢の露軍斥候騎兵と奮戦す」が掲載されたことも首肯できよう。既述したごとく、「通訳官」には平福百穂の口絵が別に掲載されている。戦地で再会した「自分」と鈴木通訳官が韓国民家の宿舎でテーブルをはさんで語り合っている図である。この翌日の偵察で鈴木は戦死することになるが、これが虚構であることも既に述べた。秋聲は事実としての田所騎兵一等卒の戦死よりも、鈴木通訳官の戦死という虚構を前景化して小説を締め括ったのである。日露戦争における陸軍最初の戦死者たる栄誉を付与された兵士よりも、非戦闘員たる通訳官の数奇な前半生とその「戦死」を描いたところに秋聲の意図があったものと思われる。ちなみに、掲載誌の満谷国四郎の口絵に「本文説明参照」とありながら、何の説明も無いのは、秋聲「通訳官」への配慮か、単なる編輯上の手落ちなのかは未詳である。いずれにしても、こうした作品の存在は、秋聲が実際の戦況の細部にも目配りを怠らなかつた事実を物語るものであらう。

さらに秋聲はこの『日露戦争実記 戦争文学』(育英舎)にもう一篇「將軍出づ」(明治37年9月)を発表している。この作品も題名から判断すれば、衆望を集める名將軍の戦地への出征もしくは戦地に登場した雄姿と活躍を描いた戦時小説と見做されるが、そうした予断を裏切る聊か興味深い作品である。

日清戦争で内外に勇名を馳せた大平將軍は人格清廉で人望も厚かつたが、四、五年前中将で引退し、現在は渋谷村に隠棲して畑仕

事などを楽しみながら悠々自適の生活を送っている。しかし日露戦争が勃発するや軍人（中尉）の息子も出征し、大平中将出馬の待望論も周囲に囁かれるようになる。それは難局が伝えられる某方面に向けて新たに第〇軍が編成され、その司令官として大平を引き出すというものである。かつて大平に兄事していた国田大将（参謀本部次長）の強い要望であった。大平は軍人としての出世には恬淡とし、中将で身を引いたが、国田は政治力もあり現在は軍部の枢要な地位を占めているのだ。大平が引退した理由は勇名を轟かせた陰に戦場で砲火に斃れた多くの部下たちの悲惨な映像に（惻隱の情）を動かさずにいられたからだという。したがって、歓喜の声に迎えられて凱旋した時も、「恭謙なる彼の胸には、云ふべからざる悲哀を感じたのである。」と記されている。それゆえ大平はこの度の出馬要請に応じなかったが、息子の壮烈な戦死の報が届くと、国田に会いに行き、出馬の要請を受けることになる。だが、続く戦場の様子は描かれず、短い後日談で「將軍出づ」は締め括られる。

「この役果て、將軍が凱旋した時、胡麻塩の其頭髮は半白となり、目は落窪み、皮膚は風露に黝んで」云々と遠征の労苦に憔悴した大平將軍の姿を伝え、二日程で大平の名前も人々の記憶から消え、国田の名前のみ隆々としている、という結末である。「將軍出づ」という題名から連想される内容とは裏腹な結末であり、「出征軍人を鼓舞」する内容でもないことは明瞭である。

なお、「將軍出づ」は全集未収録であるため、もう一点だけ内容に関する問題点を指摘しておきたい。冒頭、畑仕事の途中、隣家の植木屋の親爺（植木屋の息子も妻子を残して出征中）と会話する場面がある。將軍は、戦争を面白がっている奴がいるが、実は戦争程怖ろしいものはない、と語り、「私などはつくづく戦争の惨酷な場

面を体験してをる。」と言い、戦場では「気毒な死に様」や「残酷な目に会ってをるもの」を多数見たが、「それが皆な親兄弟や、妻子のある躰である事を考へると、如何にも傷ましくてならん。」と自らの隠棲の動機に繋がる体験を語りながら、他方で帝国軍人の墮落や怯懦にもさりげなく言及している。「私の知った人間のなかでも、随分部下の者共に嗤われた士官もあつた。劇しいのは、後から鉄砲で撃たれたのも間々ある。」（傍点小林）と、さりげなく語られているが、これは日本陸軍の恥部であり、戦争継続中のこの時点では軍部にとって看過できない表現であつたはずである。これは後述する「おち栗」とも響き合う問題点を含有した作品であつたと言える。

5

以上は他社の文芸雑誌や戦争雑誌に掲載された秋聲作品であるが、ここで春陽堂との関係を概観してみると、『日露交戦録』に秋聲作品の掲載がなかったことは既に見たこととくだが、『新小説』には「前夫人」（明治37年7月）が掲載されている。銃後の女性の運命を描いたものだが、同じく秋聲の「私」（『文芸界』明治38・1）や「我が子」（『女学世界』明治38・1）のように、たった一人の身寄りであり、苦勞して成人させた弟の戦死を嘆き悲しむ姉の姿を戦捷に沸く市内の祝祭の中に描出したものとはいささか異なる。

（私）「我が子」は共に琴の教授をしている身の上も同じだが、後者は既婚者だったが幼い子を残して離縁されており、弟を戦争で失った今、残してきた我が子への思いがいつそう募るところが異なる。これら同工異曲の作に比して「前夫人」は、有吉陸軍少將の妻勢子が有吉家に寄食する有吉の旧友野村少將（故人）の息子と不

凶したことから過ちを犯したため離縁させられた過去を持つ（前夫人）勢子を巡る物語である。有吉少将は戦地に出征し、屋敷には俊子（18歳）と春江（16歳）という姉妹がいるのだが、病弱の春江は今も母を慕い、厳格な父の怒りが解けて母が戻って来ることを願っている。姉の俊子の方はきつい性格で、父の言い付けを守り、母が近づくことすら快く思っていない。少将の出征後、勢子は思い切つて春江の病氣見舞いと留守宅見舞いを兼ねて、有吉邸を訪れるのだが、俊子だけは相変わらず冷たく対応する。春江などは引き止めるのだが、勢子は二人の成長した姿を確かめて屋敷を後にする。実は勢子は或る決意を固めており、有吉家への暇乞いも兼ねていたのだ。その決意とは従軍看護婦になることであつた。「前夫人」は、以下の後日談（この時期の秋聲作品は「將軍出づ」「軍事小説 出征」「さか浪」「数奇」など、短い後日談で締め括る形式が一つの特徴である）が語られて締め括られる。

風雲おさまつてから、勢子は其の抜群の勤勞に依り、勲六等旭日桐葉章を胸にかけて帰つて来たが、爾來彼女は看護事業に係はつて、半生を公共的の事業に献げつゝ、極めて厳正な生活を送つてゐると云ふ。彼女の前半生を知るものは、此の甚しい變化を、誰とて異しませぬものはなかつた。（『新小説』明治37年7月）

日露戦争下の女性を描いた小説には、特志看護婦になる結末が多く見られる。先に紹介した小杉天外「天下一品」も、許婚者有田少佐の戦死の後、春子は佐世保で看護婦として働いているという結末である。恋人、夫、兄や弟の戦死を機に看護婦となる女性を描いたものは多い。その意味では、秋聲の「前夫人」も戦時下における看

護婦バージョンの一つで、その意味では新味には乏しい。ただ、肉親や愛する者の戦死を契機に篤志看護婦となる他の多くの看護婦ものと異なり、前半生の自らの過ちを僅かでも償おうと四十歳前後で発起した女性を描いたところが秋聲らしい結構を備えており、やはり類似の看護婦ものとは一線を画した特異な作品と思われる。

*

この後、秋聲は春陽堂の『新小説』に「おち栗」（明治37年11月）という掌篇を発表している。これは秋聲の他の戦争小説とは全く傾向の異なる特異な位置を占める小品である。小品である故に（小説欄）には収録されず、〈雑録欄〉に収録されたものである。「一」と「二」からなるが、二つに内容的関連性は無い。二つの断片的挿話を並べて語り手の「自分」に統括させるといふ体裁であり、独立した一つの短篇小説と見做すにはやや無理がある。それ故か、秋聲は控えめに「おち栗」と題したものと思われる。これは「実なし栗」の意味であろう。二つの素材がそれぞれ独立した短篇として熟成しなかつた意を籠めた自嘲的題名と考えられるが、内容はなかなか興味深い。「一」は、没落士族の子弟で、中学卒業の頃、一人は父の死による負債を抱え、一人は士族会社の倒産により財産を失つたというよく似た境遇の二人が上京して苦学の末、一人は医者になり、一人は画家になつたのだが、画家が医者から二十円の金を借りたことを切っ掛けに友情にヒビが入るといふ話である。秋聲自身と桐生悠々の上京体験を想起させ、有り得たかも知れない感情の齟齬を描いて興味深い。「二人の親友は、同じ溪間から湧いた水が、東と西とに岐る、やうに、相離隔して了つた。」そして、医師はますます清潔・謹直に、画家はますます放縦・横着になつた。二人の間に介在する「自分」は清潔とも放縦ともつかず、きわめて臆病・平凡に

暮らしている、というものである。これは日露戦争とは全く関わり
の無い内容だが、「二」は、その「自分」が「知れる中尉を予備病
院に訪ふた。」という一文で始まり、日露戦争へと架橋される。こ
の中尉はおそらく旅順攻囲戦で重傷を負い九死に一生を得て、現在
予備病院に療養中であるのだが、その壮絶・悲惨な戦闘経緯を見舞
いに訪れた「自分」に語るのが「二」の全てである。今は秋聲と日
露戦争に焦点を当てて論じてきた本稿の目的に添って、この「二」
を中心に考察論及したい。

中尉の指揮する中隊は五百米程の或る丘を占領したが、忽ち三面
から激しい砲撃・銃撃に晒される。このままでは全滅は避けられな
いので、やむを得ず丘の後腹に退却して敵弾を避けていたが、敵の
攻撃はますます激しくなり、やがて敵兵が丘を奪還するため突貫し
て来た。仕方なくこちらも丘へ出て有らん限りの銃撃を加え、肉弾
戦となった。その実態を中尉は次のように語る。

恚なつて来ると、もう混戦だ。弾薬は竭きないまでも、撃つて
る隙がない、石塊を拾つて、手当次第投つける、目を瞑つて剣を
振廻す奴もあれば、台尻で滅多うち撲まわる奴もある。突く
奴、撲仆す奴、蹴る奴、突飛す奴、喚く奴、呶鳴る奴、石が飛
ぶ、剣が折れる。いや、逆もお話にならん。文明の戦争もへつた
くれもあつたものじゃない。全て野獸の掴合、噛合さね。(略)
もう此混戦が始まつたときは、中隊は半分しか生きてゐない。

(略)
敵の砲撃を受けはじめたのは、丁度朝の七時で、晩方まで中隊
の全滅を賭して闘つたと思ひたまへ。此時後方から大砲の丸が飛
んで来たぢやない。無論味方だ。

此は已むを得ないので、丘上の敵を攘ふには、味方をも併せて攘
はなくてはならぬ。(略)

所詮、踏とまつて、奮戦してゐる奴は、味方の大砲のために
殺られて了ふと云ふ勘定で、戦は必ずしも、直接敵の為にばかり
兵を損ずるものぢやないと云ふことを、記憶しておいてもらひた
い。

(略) 敵の戦闘力を殺ぐ目的の戦が、時には味方をも併せ殺さ
なければならぬ場合もあらうと云ふのだ。

が、孰にしても悲惨は同じことだ。

(『新小説』明治37年11月)

先ず中尉は、白兵戦の実態は「文明の戦争」もへつたくれもあつ
たものではないと語る。これは「文明国日本」が「野蛮国ロシア」
を征伐するという日露戦争の政治的プロパガンダなど通用しない戦
場に於ける剥き出しの野蛮性を語っている。続いて混戦の最後に
は、生き残つて奮闘している部下たちも「味方の大砲」によって殺
されてしまうという不条理が語られるに至る。中尉は白兵戦の中
で、大腿骨貫通の重傷を負い、それでも片足で這うように進み軍刀
を振り回し戦うが、各所に負傷し、やがて敵軍に押し返され崖下に
突き落とされてしまう。途中で木の根に引っ掛かりそのまま意識を
失うが、翌日味方によつて発見され、救助されたという。丘は前
日、敵に占領されたが、間もなく味方の別の中隊によつて再度奪還
されたのである。「乃公は漸く味方の手に救上げられたが、丘上に
勇戦してゐた部下の兵は、悉く我大砲弾の犠牲となつたのだ。」(傍
点小林) 白兵戦となつた場合、現実の戦場にあつてはこうした不条
理も戦術上不可避であることを中尉は語る。職業軍人である彼は、

この不条理を受け入れざるを得ないのだろうが、徴兵されてこの悲惨な不条理に巻き込まれた多くの部下の兵たちはどうであったか？（「春の月」の兼吉のような兵士を想起しても良い。）秋聲は次の一文でこの掌編を締め括っている。「語畢つて彼は目を瞑ちて何をか目唱してゐた。」と。おそらく彼はこうした不条理な「戦死」を遂げた多くの部下たちの冥福を祈るとともに、独り生き残った自らの運命を呪っていたのかも知れない。

6

「おち栗」の（二）は、戦場の悲惨な実態を、重傷を負い内地に後送されて予備病院に入院中の或る中尉の口を借りて語らせている。白兵戦になると、敵に殺されるばかりでなく、味方の砲弾によつて殺されるといふリアルな戦場の悲惨な不条理である。後年、司馬遼太郎は『坂の上の雲』において、旅順攻防戦の大詰めを迎えた乃木將軍を司令官とする第三軍の参謀会議の緊迫した状況を描いている。八月の第一回総攻撃以来、膨大な犠牲者を出しつつ何の戦果も無く、徒に旧態依然たる攻撃を続けている乃木軍に満州軍総司令部から児玉源太郎が乗り込み、乃木の指揮権を剥奪（表面上は借用）し、大胆な作戦転換を命令する場面がある。この「驚天動地」（司馬）の攻撃作戦の転換は、「おち栗」に描かれたような悲惨な状況が必然的に予測されるものであった。児玉の命令は二十八サンチ榴弾砲等の重砲隊の二〇三高地占領に向けた陣地転換を二四時間以内に完了することと、同高地占領の上は、二十八サンチ砲をもつて一昼夜十五分間隔でぶつとおしに援護射撃を加えよ、という無謀なものであった。第三軍司令部は乃木司令官の下、参謀長の伊地知幸介少将、副参謀大庭二郎中佐、攻城砲兵司令官豊島陽蔵少将、砲兵

中佐佐藤鋼次郎や奈良武次少佐など最新知識を学んだ砲兵の専門家を揃えている。児玉の命令に対し、奈良は重砲陣地の速やかな移動などは不可能だと反論し、佐藤は二〇三高地のような狭い場所へ二十八サンチ砲の如き巨砲による援護射撃などすれば、味方諸共粉砕することになる、と反論する。「そこをうまくやれ」と、児玉はおだやかに言ったが、佐藤鋼次郎はなお承服せず次の言葉を返す。

「陛下の赤子^{せきし}を、陛下の砲をもつて射つことはできません」

秋聲の「おち栗」は、まさしく「陛下の赤子を陛下の砲をもつて」撃つた状況を描いていた訳である。『坂の上の雲』は、この佐藤の言に対し、「児玉は、突如、両眼に涙をあふれさせ」次のように抑えていた感情を噴出させる。

「陛下の赤子を、無為無能の作戦によつていたずらに死なせてきたのはたれか。これ以上、兵の命を無益にうしなわせぬよう、わしは作戦転換を望んでいるのだ。援護射撃は、なるほど玉石ともに砕くだろう。が、その場合の人命の損失は、これ以上この作戦をつづけてゆくことによる地獄にくらべれば、はるかに軽微だ。いままでも何度か、歩兵は突撃して山上にとりついた。そのつど逆襲されて殺された。その逆襲をふせぐのだ。ふせぐ方法は、一大巨砲を以てする援護射撃以外にない。援護射撃は危険だからやめるといふ、その手の杓子定規の考え方のためにいままでどれだけの兵が死んできたか」

（『坂の上の雲』第五卷 文春文庫）

ちなみに、上記場面に関し、「この光景を、児玉付の田中国重少佐は、生涯わすれなかった」と司馬は書いている。だが、田中は後に、『参戦二十将星 日露大戦を語る』（昭和10年3月、大阪毎日新聞社・東京日日新聞社）の中で「児玉総参謀長の旅順行秘話」として詳しくこの時の経緯を語っているが、児玉の戦術変更に対する佐藤鋼次郎の反論や、それに対する児玉の涙ながらの激情の憤出については触れていない。司馬遼太郎は旅順戦の多くを谷壽夫の『機密日露戦史』（昭和41年2月、原書房）に依拠して書いたと思われる。

この書は谷が陸軍大学兵学教官時代の大正末期、新設の専攻科の学生（と言っても少佐・中佐クラスの選ばれた僅か十人の学生）を対象にした講述テキスト（全12冊）であり、公刊を意図せず、参謀本部編の公刊『日露戦史』には伏せられた事実や実態を詳細に講述したものである。部外極秘であった本書は明治百年を記念して初めて活字化された。『坂の上の雲』連載開始の二年前のことである。この『機密日露戦史』中に、児玉による上記戦術転換に関する記述がある。他ならぬ田中国重（この時近衛師団長）に取材し、谷がまとめたものである。この（1）重砲陣地の移動、（2）二十八サンチ砲による砲撃について、谷壽夫は「然るに重砲隊副官奈良少佐は第一項に反対し、第二項は友軍に危険なりとて不同意を唱えたるも、児玉將軍は砲撃は味方打ちを恐れずとて肯せず。」と記している。奈良武次が、第一項に反対した理由は記されていない上に、第二項も奈良が反対したのか、それとも他の人物か分かりにくい表現だが、佐藤鋼次郎の名前が見られないことは明白である。ただ「児玉が「味方打ちを恐れず」と述べたことは確認できる。

いっぽう、佐藤鋼次郎も日露戦後に『日露戦争秘史 旅順を落すまで』（大正13年5月、あけぼの社）を書いているが、佐藤は本書

執筆途中で没しているため、第二次総攻撃までで中絶、本書は佐藤の遺稿となった。したがって、司馬遼太郎の書いている上記応答場面（第三次総攻撃）に関しては、遺憾ながら知ることが出来ない。

さらに、当時佐藤鋼次郎（中佐）の下で攻城砲兵司令部にいた奈良武次少佐も前記『日露大戦を語る』に出席しているが、この緊迫したやり取りについての証言は見ることが出来ない。ただし、佐藤鋼次郎や奈良武次の攻城砲兵司令部は第三軍の隷下にあったが、軍司令部の参謀長伊地知幸介少将による作戦には当初から批判的であった。特に佐藤は日清戦争従軍をはさんで長期間ドイツに留学し、要塞戦の戦術・攻城砲・築城の研究一筋で通してきた専門家であった。彼の伊地知幸介参謀長への批判は手厳しい。「伊地知少将は当時薩閩の秀才と見做され、薩閩に重用せられ、殊に大山元帥の姪とかを娶つて」「昔は薩閩の秀才であつたかもしれないが旅順攻城当時では、一時の評判ほどに学識才能の見るべきものなく、頭脳もあまり明晰でない」と見え理解力にとほしく、ことに躊躇逡巡して決断力にとほしく」云々（『旅順を落すまで』）と酷評しており、こうした伊地知が指揮する乃木軍司令部への評価では児玉源太郎の評価とも一致している。また佐藤によれば、児玉はこれ以前の九月末（第二次総攻撃の失敗後）にも旅順に視察に来ている（この時児玉に同行したのは田中義一少佐）が、その時、旅順攻撃の今後について、佐藤ら攻城砲兵部に相談があった。その結果、永久築城的な掩蔽部を持つ松樹山や二龍山を攻撃破壊するには二十八サンチ榴弾砲が必要なこと、さらに早晚二〇三高地を奪取して、ここから観測して旅順港の敵艦隊を攻撃するには、もう少し西方に二十八サンチ砲を据え付けなければならぬ。「此際大奮発を以て、多数の同火砲を寄寄せ大々的の攻撃を加えなくば、旅順の攻略は」不可能であ

る、との結論に達したという。正に先に見た第三次総攻撃中に児玉が命令した作戦転換と異なるところは無い。こうした証言を考え合わせると、司馬遼太郎は劇的場面を構成するために事実を巧みに改変脚色しているようである。先の『坂の上の雲』の場面もそうだが、これに続く場面も同様である。この直前に一旦占領した二〇三高地がすぐに敵の猛攻にあつて奪い返され、憤激して乗り込んで来た児玉は、二〇三高地の西南角にまだ百名ほどの日本兵が取り付いて孤立無援の状態にいるという情報（秋聲の「おち栗」と同様の状況）を聞き、前線から離れた位置にある乃木軍司令部参謀たちの誰一人としてそれを確認した者がいないことに激怒する。そして乃木軍参謀副長の大庭二郎中佐に、一、三人の参謀を連れて今すぐ前線に赴き現状偵察に行けと命令する。児玉が旅順に到着した十二月一日夜のことである。しかし、児玉に同行した田中国重少佐の証言（当時大将）によれば、この時派遣されたのは第七師団の白水淡中佐と連合艦隊の岩村参謀および国司伍七満州軍参謀の三名であったという。しかも日付は翌十二月二日のことであった。田中によれば「当時そんな所へ行けば必ず生きて還れないと思はれてゐただから、白水の中佐などは上から下まで着物を着替へて、死んでも恥をかかないといふ非常な決心をもつて出掛けて行つた」（『日露大戦を語る』）とあり、証言は具体的である。司馬が書いている大庭二郎中佐の名前は無い。以上のことから判断すれば、今回の児玉による作戦変更が二〇三高地の占領と旅順の陥落をもたらしたことは事実であるが、乃木軍司令部の作戦に疑念をもっていた攻城砲兵部の佐藤鋼次郎や奈良武次が児玉に対して強硬に反論したとは考えにくい。

しかし、「陛下の赤子を、陛下の砲をもつて射つことはできません」という佐藤の反論がなされた可能性は否定できない。なぜなら

ば、既に彼は同趣旨の提言を軍司令部に具申ししていたからである。第一回総攻撃が乃木軍司令部の無謀な作戦により死傷者一万五千八百六十人という膨大な犠牲を出しながら、何の戦果も挙げられなかった現状に鑑み、佐藤ら攻城砲兵部では、このままでは乃木軍は全滅の他ないだろうと憤慨し、砲兵司令官の名をもって佐藤鋼次郎が直接軍司令部に到り十ヶ条近い意見上申をしたという。（佐藤『日露戦争秘史 旅順を落すまで』）その主たるものは強襲法を断念し正攻法により着実に武歩を進めるべきという作戦転換を具申しただけだが、その六ヶ条目に以下のような提言が見られる。

(六) 突撃の際に於ける歩砲兵の連携が甚だ宜しくなくて、往々我が砲兵火が我が歩兵に危害を及ぼす事があるから此連携を一層緊密にする方法を定むる事。

すなわち、突撃する歩兵と後方から援護する砲兵とは緊密に連携が取れていなければ、歩兵に危害を及ぼす恐れがある。強襲法による無謀な突撃の繰り返しの中で実際にそのような事態があったことを物語っている。まさに「陛下の赤子を陛下の砲で射つ」事態である。『坂の上の雲』に於ける問題の場面は十一月二六日から開始された第三回総攻撃の最中のことである。この後、秋聲「おち栗」に描かれた不条理な事態が展開されたであろうことは言うまでも無い。だが、「おち栗」は、この第三回総攻撃での出来事を描いた作品ではない。

「おち栗」が掲載された春陽堂『新小説』十一月号は同月一日発行である。おそらく十月十五日以前には入稿されていたものと考えられる。とすれば、「おち栗」における中尉が語った惨憺たる戦闘は、時間的に考えて第一次総攻撃の体験とみられる。（第二次総攻

撃は十月二六日からであり、執筆時には未だ開始されていない。) とうとうすれば前述の佐藤鋼次郎による乃木軍司令部への意見具申とも符合する。

それでは、第一次総攻撃に実際に参加し、「おち栗」の中尉のよくな体験を書いているものは無いであろうか。そうした格好の書として、桜井忠温の名作『肉弾』(明治三十九年四月二五日、英文新誌社出版部)を検討してみたい。言うまでも無く『肉弾』こそ旅順戦の第一次総攻撃で瀕死の重傷を負った桜井自身の体験を描いた作品に他ならないからである。

7

桜井忠温は歩兵第二十二連隊(松山)の旗手少尉として出征、第十一師団(善通寺)に属し、当初は奥將軍の第二軍麾下として南山に向かったが、既に南山は陥落したため、その後乃木將軍の第三軍に編入され、壮烈悲惨な旅順攻囲戦を戦うことになる。八月十九日に第一回総攻撃が開始されたのだが、「勇士の死屍は山上更に山を築き、戦死の碧血は凹所に川を流す。戦場は墳墓となり、山谷は焦土と化す。(略)幾許の肉弾を費やしても、彼の堅牢無比を誇つた敵壘に対して効果を奏せざるに終つたのである。」(『肉弾』第二十六)という無残な失敗に終わった。この時中尉に昇進していた桜井は、第十二中隊の小隊長として東鶏冠山から望台を目指して突撃を繰り返したが、突撃中に中隊長川上喜八大尉が戦死したため、桜井が代わって中隊の指揮を執つた。しかし最早生きている部下はほとんど無く、白兵戦の中で彼も全身に重傷を負い倒れたのである。「予は幾多の死傷せる部下?に取巻かれて孤り横たわれり。」という状況の中で、次のごとき注目すべき記述が見られる。

稍あつて、我軍よりする砲弾は、盛んに予等の頭上に破裂し始めた。着発弾は与等の身辺に落下して血煙を揚げた。或は足、或は手、或は首が、真黒に寸断せられて飛散つた。予は觀念の眼を閉じて、我砲弾に一思に粉碎せらるゝことなら、これこそ遺憾無き介錯なれと念じてゐたが、予が肉、予が骨は猶ほ其碎破するところとなるを得ずして、小破片のみが予の手足を傷つけた。予が左足の辺にゐた一負傷兵は、此の砲弾の破片で顔の真向から唐竹割に劈かれて、足掻き藻掻き、虚空を掴んで苦しんでゐたが、頓て俯伏になつて息は絶えた。

(『肉弾』第二十八「死中再生」)

ここには明確に「我軍」すなわち味方の砲弾によつて絶命する日本軍の兵士が描かれている。負傷兵のみではなく、未だ戦闘能力を保持している兵士もいたことは、この前後の記述からも窺がわれる。現に桜井は見知らぬ高知連隊の兵士(近藤竹三郎)に危機一髪的狀況で奇跡的に救出されたのである。正に秋聲「おち栗」に描かれた状況、すなわち朝の七時から晩方まで中隊の全滅を賭して戦つた所へ、後方から味方の砲弾が落下する。「所詮、踏とゞまつて、奮戦してゐる奴は、味方の大砲のために殺られて了ふと云ふ」ことになり、「敵の戦闘力を殺ぐ目的の戦が、時には味方をも併せ殺さなければならぬ場合もあらうと云ふのだ。」という「おち栗」の状況と合致するものである。『坂の上の雲』における佐藤鋼次郎のいわゆる「陛下の赤子を陛下の砲で射つ」という不条理な現実が実際に現出していたわけである。

ところで、桜井忠温の『肉弾』⁽⁵⁾は明治三十九年四月二十五日に乃

木希典大将及び大山巖元帥の題辭、大隈重信伯爵の序文を以て英文新誌社出版部から刊行されるや、大評判となり、明治天皇の天覽に浴し、桜井は異例の拝謁の榮に預かったことはよく知られている。

しかし他方で陸軍上層部の激怒を買ひ、桜井は陸軍省に呼び出され厳しく叱責されている。陸軍士官たるものが文筆を弄ぶとは何事か、ということであったというが、内容に黙過しがたい部分があったことは想像に難くない。その一つが上記の如き「陛下の赤子を陛下の砲で射つ」不条理が平然と行われる戦場の残酷性の描写だったのではないか。桜井は晩年の著書『哀しきものの記録』（昭和三十三年十二月、文芸春秋新社）で、陸軍省に呼び出された時の様子を「君は生意気だぞ。青年将校たるものが文筆を弄ぶとは何ごとか。第一序文に、惨風血雨の残酷に泣けりとするが、残酷とは何だ。日本軍が残酷だというのか」と恐ろしい剣幕でやられた。と書いている。やはり味方の砲撃に殺される場面など陸軍としては触れられたくない事実だったと思われる。ちなみに桜井はこれ以後七年間筆を絶ったが、明治四十五年、田中義一少将（後大将、首相）に勧められ、再び文筆活動を開始する。この時の田中の言に「戦勝に酔っている奴の目を醒まささんといかん。日露戦争は勝つてばかりいたんじゃない。随分ザマの悪いこともしとる。そんなことでも何でも書いてくれ」（『哀しきものの記録』）とある。これに励まされ再び旅順戦跡に赴き、書き上げたのが『銃後』（大正二年）であった。無数の戦死者への鎮魂を兼ねた書でもあった。

さて、秋聲「おち栗」と瓜二つとも言うべき体験が描かれた『肉弾』であるが、その刊行は前述のごとく明治三十九年四月二五月初版であった。すなわち日露戦争終結後のことである。にもかかわらず、旅順攻囲戦の第一回総攻撃の惨憺たる実態を描いた本書は陸軍

上層部の逆鱗に触れたのである。

ここで秋聲「おち栗」に立ち返ってみたい。既述したごとく「おち栗」の発表は明治三十七年十一月である。旅順は未だ陥落していない。日露戦争も未だ終結を見ていない時点である。戦勝（講和）の翌年に発表された『肉弾』でさえ陸軍省の逆鱗に触れたのである。目立たない形で発表されたとは言え、「おち栗」が密かに投げかけた惨憺たる戦場の不条理は大きな衝撃を齎したとしても不思議ではない。あるいは秋聲は意図して未成熟の素材を二つ無雑作に投げ出すような形式をとったのではないかも知れない。軍部は戦争報道雑誌には、たとえ小説であろうとも神経を尖らせていたであろうが、一般文芸雑誌の雑録欄にまで目が行き届かなかったのかも知れない。この小説が当時どの程度の反響を呼んだかは、遺憾ながら必ずしも詳らかではない。私見によれば、当時まったく反響を呼んだ形跡はない。既述したように、「おち栗」とは（実なし栗）の意を籠めた自嘲的題名と思われるが、この栗は火中に投げれば炸裂する危険も充分に予測されるものであったのである。だが、膨大な秋聲文学の鬱蒼たる森の片隅で全く注目されることなく埋もれたまま現在に至っている。

【注】

- (1)、秋聲は後に、日本文学学院編輯・徳田秋聲編『会話文範』（明治44年6月、新潮社）なる編者を出している。秋聲の関与がどの程度か不明だが、序文を見ても小説における会話文の重要性を考えていたことは確かである。
- (2)、『日露戦争実記』（博文館）第六編（4月3日発行）に「陸戦の第一戦死

者」と題する田所の記事があり、田所清熊は「熊本県阿蘇郡白水村大字中松の豪農田所常熊氏の実弟にして」云々と紹介されている。戦死日は「三月九日」とある。

(3)、第二師団(仙台)の野戦電信隊伍長根来藤吾(福島県二本松出身)は、三月十七日韓国鎮南浦に上陸、四月一三日に安州を通過しているが、その日記に「安州の入口に、博川西方高地にて戦死せし騎兵一等卒田所清作氏の墓あり。これ戦死者の嚆矢なり。」(夕日の墓標―、若き兵士の日露戦争日記―)昭和51年12月、毎日新聞社)と記している。名前は誤記されているが、三月八日に戦死した田所清熊の墓標が建てられていたことが確認できる。

(4)、秋聲は後に従軍通訳官になったもう一人の男を描き出している。「数奇」(明治41年9月「趣味」)がそれである。日露戦争開戦の直前にウラジオストクから帰国した安本は満州地図の翻訳をしつつ友人稲葉の勤める新聞社に入社を斡旋されたり、稲葉の友人(陸軍中尉)の妹との見合いをしたりと、落ち着かぬ生活をしている。また二人の共通の友人大森(作家)夫妻の幸福そうな家庭を訪ねたりするが、どうにも日本での生活に馴染めそうもない。若い時から極東問題に関心を持ち、6年間にロシアや満州を放浪して来た安本である。結納も伸び伸びのまま、やがて広島(大本営が置かれていた)から通訳官として従軍するとのハガキが届いた、というものである。この後「通訳官」の鈴木のごとく「戦死」の運命を辿るか否かは分からない。それにしても秋聲は、何故に明治四年になってから、明治三十七年を時制現在とする「数奇」を書いたのか、興味深いところである。

(5)、櫻井忠温の「肉弾」は、二〇一六年に中央公論社から初文庫化(中公文庫)された。同書の「編集付記」によれば、昭和三年四月の一三八〇版を底本とし、新字新仮名に改めたとある。稀代とも言うべき重版を数えた世界的ベストセラーであることはよく知られている。だが、後版では章題や本文に異同が見られ、桜井が改稿したことは明らかであるが、版毎の詳しい本文校訂は不可能であろう。ちなみに、引用部分「我軍よりする砲弾」「我砲弾のため」(初版)は、中公文庫では「砲弾」が「銃弾」となっている。「砲弾」より「銃弾」の方が、読者に与える衝撃はやわらかだが、文脈から見てこれは「砲弾」でなければ意味が通らない。なぜならば、「我が軍よりする銃弾は、盛んに予等の頭上に破裂し始めた。」とあるが、「銃弾」が頭上で破裂することはない。これは野砲や榴弾砲から発射する榴散弾で、目標手前上空で炸裂し散弾を前下方に投射するものである。また「着発弾は予等の身邊に落下して血煙を揚げた。」とあるが、これも「銃弾」で

はあり得ない。榴弾砲から発射されたもので着弾してから炸裂するものだからだ。(金子常規「兵器と戦術の世界史」)それならば、中公文庫の「銃弾」は誤植であろうか。多田蔵人氏に所蔵の一三七〇版(昭和3年4月中公文庫底本の一三八〇版と同年同月刊)を確認してもらったところ、「銃弾」であるとの教示を得た。だとすれば、中公文庫の「銃弾」は誤植ではないとしても、どの版から「銃弾」になったのか、そもそもこれは誤植なのか、桜井による改変の余地も含めて依然として未詳である。

(6)、秋聲は「おち栗」の題材を何処でどのように得たのか?これも遺憾ながら未詳である。「日露交戦録」など戦争雑誌の記者をしていたならば、取材で予備病院を訪れたこともあったであろうが、既に見た如く、その可能性は低い。文字通り「知れる中尉」であった可能性もある。後の作品だが、「戦話」(大正4年「中央公論」)には金沢の四高の同窓生の軍人と信越線の車内で邂逅し(彼から川中島合戦の専門的軍事戦話を聞かされる)た逸話が描かれているが、金沢の旧友で軍人になった者も数人いたようである。金沢の第九師団も旅順攻囲戦に最初から最後まで参加した師団で、第一師団(東京)と桜井忠温の第十一師団(四国)とともに多大な犠牲者を出している。

(こばやし・おさむ/本学名誉教授)